

「はやっていた髪形は?」「どんなお菓子があった?」…。大学生が、自分たちが生まれる前の時代、昭和期の生活や文化などについて学ぶ講義が29日、三木市細川町瑞穂のまなびの郷みずほであった。関西国際大(同市志染町青山1)人間心理学科の1年生約140人が、高齢者大学院の学生23人から多方面のテーマに沿い、聞き取り調査。平成生まれの若者にとっては、謎多き“昭和”について、素朴な疑問が次々と飛び出した。
(藤森恵一郎)

昭和の雰囲気 少し身近に

■ 関西国際大1年生 ■

高齢者23人から聞き取り

食事や服装、環境テーマ

地域貢献について学ぶ関西国際大の講義「サービスマーケティング」の一環で開かれた。高齢者の話から、現在と昔の



やファッション、環境問題などのテーマについてそれぞれ話し合った。遊園とファッションをテーマにしたグループでは、「けんけんぱ」やゴム跳びなどの昔遊びを知る大学生がいる一方、高齢者が、足袋の話題を出すと「タビって何ですか」と質問する学生もいた。

食事について話したグループの高齢者は「昔は家族みんなが集まってご飯を食べた。一緒に食べると、家族の愛が子どもに伝わり、非行に走る不良少年はなくなるなど」と、家族間のコミュニケーションの大切さを熱く説いた。

山中幸雄さん(68)は「こちらが若者は知らないだろうと思うことを意外と知っていたりして新鮮だった」。牧山達雄さん(19)は「戦中は今より食料自給率が高かったが、食事の水準は低く、自給率の意味あい、当時と今では違つという話が印象的だった」と感想を述べていた。

継承すべきメッセージ探る

高齢者の話熱心に耳を傾ける大学生―三木市細川町瑞穂

吉田

―全国各地で10競技を行う― 発揮。上位はそれぞれ東一町内の竹やぶで切られた